

平成26年1月8日  
(2014年)

## 平成24年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会  
委員長 一瀬 和夫

吹田市立博物館の平成24年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成25年6月28日および平成25年10月28日の協議会において慎重に審議した。その結果について吹田市立博物館がめざす活動目標に沿って報告する。

### 1 展示 総合評価点 3.65点

詳細は別表平成24年度事業評価点(1-①~②)を参照

#### (1)常設展示

常設展示室の展示は開館20年を経過して大きくリニューアルされていない。隣接する国史跡の吉志部瓦窯跡との立地性に関わる活用を配慮しながら、リニューアルが実現するよう継続的に努力することが必要である。館蔵資料の展示替えはしっかりとした当初の展示設計に対して、散漫さと雑然さが目立つので、常設展示ストーリーとなじませる努力が必要と考える。模型と実物資料のわかりやすい関連づけ、ひいては吉志部瓦窯跡とのリンクとテーマ性をより以上に強調することを希望する。しかし、恒常的な展示の中でも体験的な展示や触れる展示等、新しい試みもみられることを評価する。

#### (2)企画展

春季特別展は地元の大庄屋をつとめた中西家に伝来した美術資料を中心とした地域に関連深いテーマをとりあげて、しっかりした資料整理とそれに伴う展示となっている。地域の博物館の必要不可欠な展示のあり方として、大変評価できる。こうした資料と展示の蓄積がより生かされることを期待したい。

夏季展示は自然と環境をテーマとして、毎年、市民参画の形式で実施されてきているものであるが、今後は中期的なテーマ設定が最低限必要である。

企画展は、限られた予算内で毎年、同趣旨の展示を実施していくのは難しいことであり、夏季展示同様、中期的なテーマ設定が最低限必要である。そのため学芸員の「知恵」が重要となる。その意味で、平成24年度に初めて行われた学芸員による“さわる”展示解説は斬新な試みだったといえるが、目的と方法がただ単にさわるだけの傾向がある。「さわる展示」の理念が少しずつ失われつつあり、基本に帰る必要がある。

展示資料の選定、展示方法に関しても、いくつか課題もある。「さわって楽しむ」モノをさまざまな分野から集めるのが実験展示以来の本企画の特徴だが、“さわる”ことを手段として何がわかるのか(何を伝えたいのか)が曖昧になっている。また、展示資料の数が増えたのは歓迎すべきだが、一部の資料がさわりにくい場所に置かれたり、不安定

な配置になっているケースが見受けられた。展示とのリンク性も不明瞭である。点字キャプションは、触読しやすい場所にしっかり固定しないと、宝の持ち腐れになってしまう。今後さらに、「安心して、ゆっくりさわることができる」展示方法を検討する必要があるだろう。目の不自由な方にやさしい展示はその他の方にもやさしく、わかりやすいという総合的な幅広い理解につなげることを期待する。

秋季特別展に関しては、千里ニュータウンの誕生は、日本の都市計画や市民生活のスタイル、地域コミュニケーションなど、さまざまな点で大きな影響を与えたもので、初入居 50 年を記念して企画されたこの展示は、きわめて時宜にかなったものであった。市民展示実行委員会を作り、市民の意見を大いに取り入れながら準備を進めたこと、展示終了後にミニ展示会を開催して資料展示を延長し、市民の要望に柔軟に応じたことも評価される。観覧者の評価も高いものの、実際に観覧した印象では、展示品の数が期待に反して少なかったこと、現在の地点からみて、千里ニュータウンの試みをどのように位置づけるべきかについての考察があまり掘り下げられたものでなかったことに、不満が残った。また、この展示に限らないことであるが、昭和 30 年代、40 年代のことを知る人たちにとっては、当時の暮らしにまつわるものは例外なく懐かしいものであるが、後ろ向きな展示という評価もあり、特定年代層の枠の中での観覧者の郷愁に頼りすぎた面がなかったかどうか、振り返っておく必要がある。また、市民参画の展示としては、均衡性と総合性を高めるためにも企画当初から館の基本方針の明確な提示とまとめに向けての各段階での館の適確なチェックが必要と思われる。フロア・スタッフは単なる文字解説以上のものを利用者にもたらせているようである、今後の拡大、展開とその充実、定着を望みたい。

特別企画「むかしのくらしと学校」については、アンケート調査によると小学校 3 年生の学習内容の関係資料がそろえられ、はた織り、火打ち石、あかりなど体験型、さわられる展示の手法は単なる文字解説以上のものを利用者にもたらせているようであり、好評であることがわかる。今後は、ふりがなのことや画像の説明と漢字表記について、小学校 3 年生（小学校 2 年生修了の子どもと考えて）の漢字力に見合った表現を追求していけば、高年齢層の郷愁に似た感覚と経験的な導きなどが加われば子どもたちの理解がさらに深まるものと思う。

総じて、1 年間に 5 回もの特別・企画展を開催するのは展示室が狭いとはいえ、大変な仕事量であり、評価に値する。それも社会的展示、歴史的展示、美術的展示と各ジャンルにわたって展示されている。学芸員の仕事量は限界を超えているのではないか。一方で、展示室が狭いので、より地域に密着した展示となる傾向にある。吹田市と地域の特性を際立たせるためにも、京都、大阪に挟まれた土地でもあるし、吹田市の資料を中心としながら、博物館の本来的なものの比較という役割を省みて、もう少し地域を抜け出した展示も可能なのではないか。春季特別展のように庄屋さんや各寺院の所蔵品を展示することもいいだろう。

展示方法論については、非視覚的展示法の検討を積極的に進め、実際の展示においてその成果を試しており、評価できる。ただし、視覚的展示法の改善の試みは、どの程度なされているのか。従来型の展示方法の問題点と改善方法についても絶えず検討する必

要がある。

年齢別の観覧者の比率は時間的余裕のある 60 歳代が多数を占めているが、展示内容により観覧者の年齢比率が変化しており展示内容の工夫や広報の方法により、より幅広い年代層の来館となっていたことがわかる。多くの市民に来館していただき博物館の存在を知ってもらい、展示を楽しんでいただくという深い思いの詰まった展示であったことがわかる。吹田市立博物館の企画展は民間の企画会社で作るお仕着せの企画展とは違い、こじんまりとしながらも味のある展示である。これからも準備や調査を充分に行い、資料などを展示技術などでカバーすることをしないで、市民や子どもたちにとって最も大切なものは自覚し、さらに大切に思えることを誘う博物館として、一層の磨きをかけていただきたい。

## 2 市民参画 総合評価点 3. 35点

詳細は別表平成24年度事業評価点(2-①~③)を参照

ボランティアは順調のようであり、展示を支え、企画からフロア・スタッフなど運営までさまざまな分野で協力がなされ、多様なあり方が推進されている。博物館に関心をもって来館者に対して少しでも心地良く楽しんでいただきたいとの館の願いに呼応し、博物館を支えていくサポーター的役割を果たしており、期待できる。

一方で、アンケートの中に「ボランティアガイドさんがおられたら説明していただけたのに・・・」という記述があり、案内ボランティアの恒常的な配置がリピーターや来館者の増加につながるということが予想されるだけに今後とも重要な課題ともいえる。

さらなる自立性のある展開と新しい人が活動しやすい開放性の高いボランティアの組織づくりが求められる。自己の特性や資質、経験を活かし、もしくは開発していただけるような環境づくりを行うことが期待される。博物館は維持、発展のために継続して博物館の内容や機能に関する知識を増やす支援を行い、企画展や特別展にあわせて開催される講演会の後援やカタログ制作などにも広がる市民(ボランティア)を育成し、市民も館も成長しあうことができれば素晴らしいことと思われる。

参加者に関しても交通手段などクリアしなければならない課題もあるが、現状では中高年の方が多いようであり、博物館近隣の方々を中心に若い方や中、高、大学生へも積極的に参加を呼び込めば活動に膨らみができ、博物館の熱意ある取り組みに応えてくれる存在になると思われる。

市民参画にはあらゆる層の市民との協働が理想と思われる。

市民ニーズの把握についてはアンケート以外の手段(例えば、生涯教育関係事業会場でのインタビューとか)も検討されると、より生の声が聞かれるのではと思われる。アンケートでの肯定的、否定的コメントはかなり有効であり、データが大型化すれば、また新たな次元での分析も可能となる。次の地域学習とともに、地域の参画度の評価が各委員で低いように思われる。近隣に恒常的、長期的に支援いただく声かけと地域活動が必要であろう。

## 3 地域学習の拠点 総合評価点 3. 49点

詳細は別表平成24年度事業評価点(3-①~②)を参照

地域学習の支援については、子どもおよび若年層に対するイベントを子どもが出かけやすい学校の長期休暇の期間を利用して積極的に実施し、参加者数割合も25%を占め、かなりの割合となっている。また、バックヤードツアーは博物館を知る良い機会となっており、良いことである、出前講座も積極的に行われ、地域学習の拠点としての役割を十分になっており、この点は、大いに評価できる。

千里ニュータウン情報館との共催で、出前展示「ニュータウン半世紀展」を実施し、多数の観覧者を得た。

レファレンス業務や特別利用も、情報拠点としての博物館の存在感が示されている。このサービスがわかるような表示の準備を進めていただきたい。

地域文化の情報拠点としては、北大阪ミュージアム・ネットワーク事業は新たな取り組みへの意欲が感じられ、評価できる。今後もより積極的な活動を行っていただきたい。また西国街道連携事業は地域として関連、興味あることで大いに継続実施されたい。

観覧者・入館者数とも再び増加傾向にあり吹田市立博物館が『地域学習の拠点』としての存在感を増していることが実感できる。ニュータウン半世紀展の感想に「地域性の高い内容でありながら同時に普遍性のある企画は地域内外の耳目を集めるように思います。」というコメントがあり、「地域学習の拠点」の『地域』をより広い意味にとらえることもできる企画を今後も増やしていただきたい。

各種展示についてアンケートを行い、任意のため回収率はそれほど高くはないが、満足度を把握したことは評価できる。今後は第三者評価のシステムも構築する必要がある。市民をはじめとする来館者の吹田市立博物館に対する期待に対応して、館の基本的な在り方を市民や関係団体に広く示すなど、ともに作りあげていく姿勢をアンケートから引き出されている。「よかった」以外のさまざまな回答に真摯に向き合って次につなげる努力は、吹田市立博物館が教育、啓蒙主体から市民とともに活動するスタイルをとる顕著な表れではないだろうか。この姿勢は吹田市立博物館が地域社会の発展に欠かせない場になりつつあることを示すものである。ただ、「集計」だけでなく、それをふまえた「分析」がどの程度まで行われているのか、わかりにくいところがある。当然「分析」が行われ、以後の展示計画に反映されているのであるが、「分析」結果を公にすることも必要であるように思われる。集計・分析・開示で可能な改善を進めていくことを期待する。

#### 4 情報発信 総合評価点 3.53点

詳細は別表平成24年度事業評価点(4-①~④)を参照

「情報発信」で特筆に値するのは、秋季特別展「ニュータウン半世紀展」であろう。積極的なマスコミへの広報が取材、記事掲載に結び付いている。今後も吹田という地域性に根ざす地道な博物館運営、フットワークを活かす広報活動に期待したい。学校教育との更なる連携の強化、ホームページの充実は、来年度以降の継続課題と位置づけられる。

基礎的、基本的な資料のデータベース化の作業が滞っている。その日常的な作業化と効率化と促進化を図るためにホームページのコンテンツに加えて逐次、更新し、情

報発信ツールに高めていく必要がある。

## 5 学校教育との連携 総合評価点 3.64点

詳細は別表平成24年度事業評価点(5-①~②)を参照

学校との関係については、各委員の評価にはばらつきがある。各事業に目的的な関連性を強調、明示していき、それらの実行性について確認していく必要がある。小中学校教員を対象にしたバスによる吹田の史跡等見学(歴史探訪)は非常に興味深い試みである。地域史を知ることによって地域を総合的に理解する一助となり、ひいては児童、生徒のくらしをも理解でき、彼等を理解するうえでの基礎的な力となり得ると思われる。ただ、「気づいていたら参加したのに」と言う教員もいる。教職員への一層の周知をはかっていただきたい。

中学校と博物館の協働という視点から考えると、これまで隣接する佐井寺中学校でさえ、両者の関係は希薄であったと言わざるを得ない。唯一、「社会体験・職場体験」学習の受け入れ先としての認識しか持っていない教員が多いことも事実である。その意味で、平成24年度に、佐井寺中学校の社会科教員と博物館担当スタッフが「中博連携」についての意見交換会を数回行い、共同で歴史学習教材を生み出したことは特筆すべき画期的な進展といえる。今後は、これが単発的なものに終わらず、その有効な活用方法も含めた問題点の整理、改善を図るとともに、これを切り口として、より広く(佐井寺中学校だけではなく)、より深く(中博のさらなる共同作業)連携、協働していくことが課題である。

また、夏季や冬季における長期休業中の宿題・課題などでの博物館の活用についても、受け皿である博物館のほうから「こんな時に役立つ」「こんな活用の仕方がある」というような、宣伝効果をねらった取り組みが必要と思われる。

## 6 資料の収集と保管 総合評価点 3.53点

詳細は別表平成24年度事業評価点(6-①~④)を参照

資料の収集については、平成24年度は「特別展のテーマに関連した資料の寄贈・寄託を市民に呼びかける」ことを掲げ、千里ニュータウン関連資料の寄贈を受けるという成果をあげている。また、旧中西家・西尾家関係資料の収集も行われている。これらはもちろん評価できることであるが、いずれも特別展に関連して行われたものであり、日常的に未調査の市内旧家の古文書発掘・整理などは行われていない。受入体制が不十分であるためか、特別展関係のものを除いて、資料寄贈・資料寄託の呼びかけもなされていない。しかし、新『吹田市史』編纂事業が行われていない現在、これらの業務を担えるのは唯一吹田市立博物館のみであり、館としてはその責任を果たす義務がある。『吹田市史』編纂終了後、長い年月が経ち、本来保存・活用されるべき多くの古文書類が廃棄され、また散逸したのではないかと想像される。また、史資料等の収集事業とともに、博物館所在地の市域の環境変化は著しいので、博物館自体で現状の環境・景観の記録写真などを収録することも必要であろう。

博物館は、人目を引き、多くの観覧者を見込めるイベントを活動の中心に据えがちで

あるが、地道な資料収集・整理活動を疎かにしてはならない。博物館は、「たくさんの人に見に来てもらってなんぼ」だけの世界ではない。また、博物館評価においては、地道な資料収集・整理活動などは下位に置かれているのが現状である。このような状況を改善するための意識改革や評価システムの再考も必要である。

史資料等の登録・保存事業については、収集点数の多少にもよるが、その年度の収集品をその年度に登録・処理していることは評価できる。また、登録済みの収集品の即時公開（収集品展）、展示品の修復以外にも普及事業で使用する複製品の製作、毎年の新収集品燻蒸事業とともに数年毎に史資料等を展示する展示室の燻蒸事業、などが必要ではないだろうか。

吉志部瓦窯跡のサイト・ミュージアム、そのテーマをもとにした窯関係資料の充実という課題も特筆しなければならない。また、収集には研究、加工・展示活用に供するハンズ・オン資料の開発も必要である。この開発計画も練っていただきたい。

収蔵庫の拡充については、財政当局、議会筋、関係文化団体等への積極的な働きかけが継続的に必要と思われる。

## 7 調査研究 総合評価点 3, 33点

詳細は別表平成24年度事業評価点（7-①～②）を参照

特別展・企画展の準備過程で関係の調査・研究が行われ、その成果が図録、『博物館だより』、『吹田市立博物館館報』に適宜反映されている点は評価できる。

しかし、調査・研究が、企画展示関連のものが中心で、未調査の市内旧家の古文書調査や目録作成などがおろそかになっているように思われる。仮に普及事業によって、これらの地味で目立たないものの極めて重要な事業が後回しにされているのであれば、考え直す必要がある。古文書調査や目録作成などは、結局地域学習にもつながる有益な事業であることを、もっと認識する必要がある。これらは、地味で多大の労力を必要とする作業であるが、市域の歴史を明らかにし、展示に加工・反映させる上でも、また、特に市内にあるものは市外への史料の散逸を防ぎ、一括して保管・研究して生かしていくことは、きわめて重要な吹田市立博物館の使命であり、是非積極的に進めて頂きたい。

## 8 施設の整備・維持管理 総合評価点 2. 88点

詳細は別表平成24年度事業評価点（8-①～③）を参照

吹田サービスエリアからのアクセスの可能性については継続的に検討している努力を評価する。

設備の点検については、アンケートによると、展示室の展示補助の機器についてビデオで楽しむ人もいれば機器にクレームをつける人もいて、定期的点検でなく日常的点検が必要ではないか。

設備の面では経年劣化に対して、順次対応していることを評価する。しかし、近年美術館・博物館における種々の被害がみられる。例えば新潟の美術館での虫害、京都市美における壁面の崩落、奈良国立博物館での雨漏り等、設備面だけでなく建物の老朽化によることも多く、建物面の対応も必要かと思う。

アクセスの課題は毎年の懸案となっている。市の広報の呼びかけや市民会議のような場でのアイデア募集など新たな知恵が望まれる。

## 9 社会貢献 総合評価点 3.75点

詳細は別表平成24年度事業評価点(9-①~③)を参照

人材育成では博物館実習、JICA研修、インターンシップ等、自己評価の高い項目もあり、若い方々への力量のレベルアップや相互作用による研修につながり、今後とも継続していかれることを期待する。

### 総評

吹田市立博物館は、少人数のスタッフなど困難な条件の中、市民とともに活動し地域を変えていく力を持つ地域博物館としての存在感を示している。これからも地域のさまざまな課題を軸として、必要なものを構成し総合化するなかで新しい価値を発見していく視点と地域課題を市民が主体として取り組めるよう、博物館の充実を期待する。

一点気にかかる事は来館者数を追い求め過ぎると教育原理によってではなく、市場原理のメカニズムに支配される危惧の念を抱く。両者が両立するような運営を期待する。

\*なお、活動目標ごとになされた総合評価点は学識経験者6名、学校教育関係者2名、社会教育関係者3名、市民公募委員2名からなる計13名の博物館協議会委員による事業計画ごとになされた5点満点の個別評価の平均点とした。